

地鎮・鎮壇の考古学的研究

村瀬勝樹

序

人は、土地を利用する際に建築や土木工事などを行う。そして、敷地や建物の安寧を土地の神に祈願する儀礼を行うことで、その土地を鎮め、清浄ならしめようとする。発掘調査においては、建物の基壇や敷地・建物に関連する土坑より土地神を供養する品々を納めた容器や鎮物が発見されることがある。現在でも神道では地鎮祭として行われており、見かけることも多い。かつての陰陽道では土公祭と称する土地鎮めの祭儀を行っていた。仏教では、密教において地鎮・鎮壇と呼ばれる修法があり、宗派によっては安鎮、宅鎮や土公供等とも呼ぶ。このように、宗教・宗派によって、その性格は同じであっても名前が異なる為、研究上の用語として、土地の神を供養する儀礼を地鎮や地鎮め等と総称することもある。我々は、考古学資料や文献史料などから、神話や教義を伴う多様な儀礼の形態をもった土地

神に関する信仰を知ることができる。なかでも、地鎮・鎮壇の考古学的研究においては、水野正好、森郁夫や木下密雲など先学の諸氏によって、その古代から近世にわたる様相とその背景が明らかにされてきた。拙稿は、それらの成果と業績の上に立って、私見を記したものである。

一 興福寺南円堂の地鎮と鎮壇

興福寺南円堂は藤原冬嗣により八一三（弘仁四）年に創建された八角円堂である。本尊は不空絹索観音であり、撰関家藤原氏の氏寺として信仰を集めた。又、西国三十三カ所第九番として今も人々の参詣が絶えない。

平成五年の折りに、平成大修理として奈良県教育委員会文化財保存事務所による半解体工事中に地鎮・鎮壇の遺構が検出された。その埋納時期は創建時と一七一七（享保二）年焼失以後の再建時と二度である。創建基壇は、現入側柱上面より二メートル下から、一・五メートルの高さが残っており、丁寧な版築で築かれている。和銅開珎から初鋳七九六（延暦一五）年の隆平永宝までが十八層にわたる基壇盛土各層で出土した。土を盛る度に皇朝十二銭を散供する作業を繰り返して行っていることから、創建基壇を築く際に執行された祭儀といえる。これは、飛鳥時代以来の、特に奈良時代に盛行した土地神に銭貨を供えて土地を鎮める、いわゆる地鎮作法の形式の一つである。

一方、再建期の地鎮・鎮壇遺構は江戸時代の密教法具を用いたものである。地鎮遺構は、創建基壇から積み上げられた後世の盛土上面で検出、木製須弥壇の中心直下より、やや後ろ寄りに位置している。円形を呈する直径四五センチ、深さ六〇センチの埋納穴を穿ち、穴の底中央に黄銅製賢瓶を置き、その脚部を粘質土で動かぬように固めていた。

賢瓶内部には五宝五穀等が納められ、外面には五色糸の残滓が認められている。底面より三センチほど埋めた後、賢瓶の四方と中央に、大きさが平均一センチの玉石いわゆる五色玉を配し、その周囲には稲穀が撒かれていた。埋納穴を埋めるにあたっては、その埋土には精選した黒色砂質土を用いており、その丁重さを伺うことができる。又、鎮壇遺構は、共通して外陣の瓦敷の下、各入側の中央にあたる地点に東面、東北面と南面の計三カ所で確認された。残る五面にも同様に遺構の存在を予想できることから、合計八カ所となる。埋納穴は、直径四五センチ、深さ六〇センチで円形を呈する。銅製檝を穴底に立て、倒れないよう粘質土で固めた後、その上端に銅板を打ち抜いた三結輪宝を載せていた。これらの鎮壇具を埋納した時期は地鎮遺構とほぼ同時期と推定される。この南円堂地鎮・鎮壇例の重要な特徴は二点ある。例えば、興福寺大御堂や石山寺多宝塔例では、基壇中心に一カ所の方形の埋納穴を設け、その中には、輪宝を八方に配し、中央に賢瓶を置いていた。法具の数は、南円堂と同じではあるが、個々の輪宝を埋める埋納穴は省略されている。遺構と遺物の配置からみると、一穴で八方と中央を点ずる形式をとり、東密では略儀とされる地鎮を兼ねた鎮壇作法の例であった。南円堂例にしても、堂の清浄を保ち、邪敵の侵入を防止しようとする結果の思想をもつことは同様である。その勧請する本尊は中央は地天、八方は八天であり、密教法具を鎮物として用い、八方を封じて中央を点ずる構造をとっていることも共通している。しかしながら、八枚の輪宝と一口の賢瓶を、それぞれ単独に、埋納する九穴の形式をとることが異なっている。これが、特徴の第一点である。加えて、五色玉を使用していることが第二点である。これら二点の遺構の構造と遺物使用法における特徴は、真言の儀軌を記した『覚禪抄』にみえる地鎮・鎮壇作法の本儀にも合致している。このことから南円堂例は、儀軌の本儀に則り、東密小野流の正式な地鎮・鎮壇作法に基づき実修された貴重な遺構例と言えるのである。

二 地鎮作法と五色玉

ここでは、今まで類例の少ない遺物の五色玉を取り上げ、地鎮・鎮壇作法に占める位置を明らかにし、その性格を考えてみたい。その五色玉を使用した南円堂再建時の地鎮・鎮壇は真言小野流の作法に則ったものであったことは前述した。密教の二派である天台・真言（東密と台密）には、ともに土地を鎮める作法を記した儀軌が伝わっている。両者の相違として、埋納穴の構成や埋納する密教法具等の鎮め物が異なることを森郁夫氏が既に指摘している。東密では建物を建てる以前に修するのが地鎮で、建物を建てた後に行うのが鎮壇であり、両者を別々に執行するのが本義であった。地鎮と鎮壇では用意する鎮物の内容には違いがある。地鎮の際は鎮穴に紙に包んだ五宝五穀等を納めた賢瓶と五色玉を埋納するが、鎮壇では輪宝八枚と檝八本を用意し、建物の八方に檝を立て、その上に輪宝を載せた状態で埋納するとしている。対して、台密では東密の地鎮・鎮壇にあたる修法を安鎮法や鎮宅法という。安鎮法では、賢瓶と五色玉は用いず、鎮穴の底に輪宝を置き、その上に檝を立てた後、五宝五穀を散供し、五色幣帛も共に埋めるのである。つまり、密教の地鎮・鎮壇においては、五色玉は東密の作法による地鎮を修する際のみ使用する鎮物であったことがわかる。

さて、『覚禅抄』に「小野説、埋加五色玉」とあり、又「廣澤伝、五色石」や「五丸石」とある。小野流では五色玉、広沢流では五色石や五丸石と記述しているのである。玉と石という表現の差は、単なる異名であるのか、それとも使用法や材質・形の違いを意味しているのであろうか。高野山大門の元禄再興時の地鎮遺構では賢瓶の直上から、

五個の石が中央と四方に置かれて出土した。石はそれぞれ色合いが異なり五色を意識しており、楕円形を呈し、径六センチ・厚さ三センチと表裏に面をもつ平たいものである。それぞれの石には異なる梵字が墨書されていた。この場合、五色玉というより五色石と呼ぶにふさわしい。当例が広沢流の作法によるものかどうかはさておき、地鎮に使用されていることや四方と中央の五方の色を意図していることは南田堂例と共通している。このことから、五色を意図した球形もしくはそれに似た形の石が「五色玉」であり、五色を意図した厚みがなく面を有し墨書された平石が「五色石」であるとすれば、「覚禪抄」に記載する五色玉と五色石の名称の違いは形の違いにあったと推測できよう。

五色玉の使用に関する記述としては、「頼頼九条堂」の地鎮支度に「金銅瓶一口、五色玉少々」とあり、用意する品々の中にその名がみられる。また、その配置に触れる記述として、口伝に、五宝玉を納めた賢瓶を鎮穴の底に置いた後、真言を唱えつつ、瓶の「本地四方、可埋五色玉・五穀粥」とある。五色玉を使用する場合は、瓶を中央とした四方に置き、合わせて五穀粥もしかるべき皿などの容器に盛った後、東西南北中央に配置して埋めたのである。ただし、地鎮支度や事例のなかには五色玉の記述がみられない場合もある。特に略儀の地鎮を兼ねた鎮壇作法では、鎮壇用の輪宝・概と共に地鎮用の瓶は用意するが、五色玉は省略される場合が多いからである。五色玉は地鎮・鎮壇を修する時に常に使用された鎮物ではなかった。東密の地鎮作法においては、あくまでも賢瓶が欠くことのできない鎮物の主体であって、五色玉は一段下がる扱いであったことを示している。

ところで、五色玉の名称の由来となる「五色」の考え方には大きく分けて二説がある。一つは木火土金水の五元素で万物が構成されているとする陰陽五行説によるもの。もう一つは地水火風空の五元素から物心両世界の構造を説く仏教の五大説（五形説）によるものである。この両者が、五元素の表象として青赤黄白黒の五色を用いることは共通

している。従って、諸事象ごとに元素を配当する場合、両者間では五色の配置に相違が生じてくることになる。本稿で取り上げた地鎮・鎮壇作法のような土地を鎮める儀礼の性格上、基本視されるのは方位観念である。例えば、ある宗派・流派がもつ方位観念を儀礼に使用する鎮物に反映させるならば、鎮物の配置にもそれが現れるであろう。言い換えれば、五色玉の配置から、その儀礼を執行した宗派・流派のもつ方位観念を推定できるであろう。そこで方位別に、五色玉の出土した遺構、五色の配当と象徴する神仏を整理してみると、

| | 中央 | 東方 | 南方 | 西方 | 北方 |
|-----------|------|------|--------|-------|--------|
| (一) 南円堂 | 白 | 赤 | 黄 | 青 | 黒 |
| (二) 高野山大門 | 白 | 青 | 黄 | 赤 | 黒 |
| (A) 胎蔵界 | 白 | 赤 | 黄 | 青 | 黒 |
| (B) 金剛界 | 白 | 青 | 黄 | 赤 | 黒 |
| (C) 陰陽五行説 | 黄 | 青 | 赤 | 白 | 黒 |
| (a) 胎蔵界四仏 | 大日如来 | 宝幢如来 | 開敷華王如来 | 無量寿如来 | 天鼓雷音如来 |
| (b) 金剛界四仏 | 大日如来 | 阿閼如来 | 宝生如来 | 阿弥陀如来 | 不空成就如来 |
| (c) 五方土公神 | 黄帝土公 | 青帝土公 | 赤帝土公 | 白帝土公 | 黒帝土公 |

となり、次のことが判る。南円堂の五色玉は胎蔵界の方位と合致し、胎蔵界四仏を象徴したものである。又、高野山大門のそれは金剛界四仏を象徴したものであり、石に墨書された種字も一致する。つまり、東密の地鎮作法で使用する際、それが表しているのは金剛界四仏と胎蔵界四仏との場合があった。言わば、五色玉は密教の教義とその曼陀羅

で象徴される世界観がそれ自体に込められた鎮物と考えられるのである。